沼津に生まれ育った不屈の歌人

明石 海人 明治三十四～昭和十四年

大正14年秋頃
（明石海人顕彰会所蔵）

明治三十四年七月五日、駿東郡片浜村（現・沼津市西間門）に生まれます。本名は野田勝太郎。片浜尋常小学校（現・市立片浜小学校）、沼津商業学校（現・県立沼津商業高等学校）を経て静岡師範学校（現・静岡大学教育学部）を卒業後、現在の沼津市や富士市、富士宮市の小学校に教員として勤め、恵まれた結婚をしましたが、二十四歳のときにハンセン病を発病しました。この診断は、勝太郎を悲運のどん底に突き落としました。妻子と別れ故郷を離れた海人は、再起をかけて療養地を転々とし、昭和七年岡山県の国立療養所長島愛生園に入所します。長島での年月は、知覚麻痺、失明、気管切開という三大苦に襲われた壮絶な闘病生活でした。しかし、療友に支えられながら歌人として精進します。

昭和十四年、亡くなる間際に出版された歌集『白描』はベストセラーとなりますが、六月九日長島愛生園で死去しました。三十七歳。沼津市西間門の共同墓地に眠っています。

平成十三年には、生誕百周年を記念し、沼津商業高等学校同窓会・明石海人顕彰委員会により、学校と千本浜公園内に歌碑が建立されました。

また、令和五年には郷土の偉人の一人として、「ぬまづの宝百選」に選ばれました。

母校の市立片浜小学校（大諏訪）

大正７年沼津商業学校卒業の頃
（明石海人顕彰会所蔵）

母校の県立沼津商業高校（駿東郡清水町徳倉）

沼津商業高校敷地内の歌碑

昭和４年　家族と　静岡での別離
（明石海人顕彰会所蔵）

大正 14 年秋頃　教員時代
（明石海人顕彰会所蔵）

■明石海人の作品から

次の文章は、歌集『白描』（昭和十四年）の序文です。当時ハンセン病は、らい病と呼ばれ、海人が罹ったときは、治療法が確立されていませんでした。厳しい闘病生活をおくりながらも短歌などを創作し、前向きに生きようとする覚悟が記されています。

癩は天刑(1)である。

加わる笞(2)の一つ一つに、嗚咽(3)し慟哭(4)しあるいは呻吟(5)しながら、私は苦患(6)の闇をかき捜って一縷(7)の光を渇き求めた。

――深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない――そう感じ得たのは病がすでに膏肓(8)に入ってからであった。

齢三十を超えて短歌を学び、あらためて己れを見、人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如何に美しく、また厳しいかを身をもって感じ、積年の苦渋をその一首一首に放射して時には流涕(9)し時には抃舞(10)しながら、肉身に生きる己れを祝福した。

人の世を脱れて人の世を知り、骨肉(11)と離れて愛を信じ、明を失っては内にひらく青山白雲をも見た。

癩はまた天啓(12)でもあった。

注

（1）天がくだす刑罰
（2）木の若枝でつくったむち
（3）声を抑えて泣くこと
（4）声を上げて泣くこと
（5）苦しみや悲しみなどのために、うめくこと
（6）苦しみや悩み
（7）ほんのわずか
（8）病気が医者の手の下しようもないほどひどくなった状態のこと
（9）激しく泣くこと
（10）喜びのあまり手を打って舞うこと
（11）親子などの家族
（12）天の導きや神の教え

短歌

市内にある歌碑に採用されたものを紹介します。特に次の短歌は、遠く離れた場所で闘病しているときに、偶然眼にした故郷・沼津の海の映像を見たときの感動を詠ったものです。

ゆくりなく映画にみればふるさとの
海に十年のうつろひはなし

千本浜公園内の歌碑と片浜海岸

千本浜公園内の歌碑

シルレア紀の地層は沓(とほ)きそのかみを
海の蠍(さそり)の我も棲(す)みけむ

さくら花かつ散る今日の夕ぐれを
幾世(いくよ)の底より鐘の鳴りくる

以上の三首は、千本浜公園内の歌碑に刻まれています。次の一首は、母校である県立沼津商業高等学校敷地内の歌碑に刻まれています。

わが指の頂(いただき)にきて金花虫(たまむし)の
けはひはやがて羽根ひらきたり

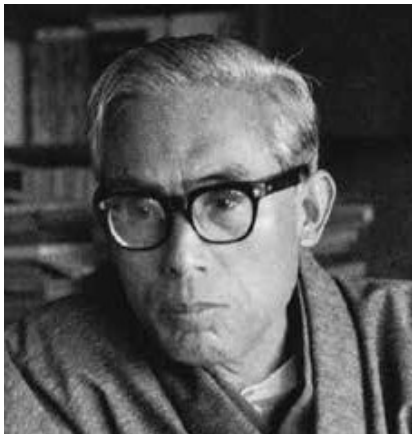
■読める明石海人の作品

『白描』は、平成十三年に明石海人顕彰会から復刻版が刊行されました。死後、『白描』未収録の歌をまとめた『海人遺稿』(昭和十四年 改造社)や、『明石海人全集』(昭和十六年 改造社)、『明石海人歌集』(平成二十四年 岩波書店)などがあります。これらは絶版になっていますが、沼津市立図書館などで読むことができます。

明石海人(野田勝太郎)の墓(西間門共同墓地内)

沼津中学校出身の歌人

大岡　博　明治四十～昭和五十六年



昭和44年書斎にて
（『菩提樹』大岡博追悼号から）

明治四十年、静岡市に生まれます。貿易商だった父の関係で少年期までを神戸で過ごし、後に三島町（現・三島市）に定住しました。旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）に進学し、在学中より校友会雑誌に短歌や詩などを寄稿しました。

大正十三年に卒業後、三島第一尋常高等小学校（現・三島市立南小学校）で代用教員をし、昭和三十九年、六十六歳まで教師を続け、その後も六年間沼津精華高等学校（現・沼津中央高等学校）に勤めました。この間に県教職員組合委員長、県児童会館初代館長、中学校校長など数々の重要な役職を務めました。

教職の傍ら作歌を続け、昭和九年、歌誌『菩提樹』を創刊。歌人・窪田空穂に師事し、歌壇で活躍しました。歌集に『渓流』（昭和二十七年）などがあり、中学時代の恩師・前田千寸宅（上香貫二瀬川町）訪問時を詠ったものなど、沼津に関する作歌も収録されています。このほかに『三島町歌』（昭和六年、現・『三島市歌』）、『三島市制施行祝賀行進曲』（昭和十六年）などの作詞も手がけました。

また、沼津中学校の先輩である芹沢光治良を尊敬し、後に交流を深めました。昭和五十六年死去、七十四歳。訃報に際して光治良は弔歌を寄せ、その死を悼みました。没後の昭和六十一年、三島市立公園楽寿園（三島市一番町）に大岡博歌碑建設委員会により歌碑が建立されました。

■沼津を詠った作品

初期の歌集『渓流』には、息子・信についてや、沼津を訪れた際に詠った短歌が収められています。

信（まこと）、中学に進む（短歌）

子を先に立てて踏みゆく橋板の
踏むに揺らぎて川瀬のひかる

橋板を踏み鳴らしてはゆく童（わらべ）
たのしくあらむ今日の門出を

心きほひ振りむきもせぬわが童
橋渡りをへ道曲りたり

今日の心尊みもちて汝（なんじ）が一生
踏みゆきぬべし にこやかにしも

昭和 22 年　大岡博と信（大岡かね子氏所蔵）

己(おの)れをし恃(たの)むほかなき世に生れ
今日をもち得し心忘るな

父われも嘗(かつ)て仰(あお)ぎて怖(お)ぢたりし
校門見上げ振りむけり童

敷きつめし玉石踏みて急ぐ子を
我かと思ひ息あへぎけり

三(み)津(と)水族館（短歌）

全九首のなかから抜粋して紹介します。

青(あお)く透(す)く潮の底にひそみゐ(い)て
その眼つぶらに見張れる赤鯛(あかだい)

岩かげの暗きにさし入る光さけ
うごめくみれば後じさる海老(えび)

長き髯(ひげ)ゆるらに振りて伊勢(いせ)海老の
すさるとみればあなご現る

空の光眩(まば)ゆきばかり射し入れば
水よりもやや青き鰯(いわし)よ

水族館廂眩(ひさしまぶ)しみ仰ぐ眼に
めぐらす山の緑の深し

伊豆・三津シーパラダイス（旧三津天然水族館）

昭和五十六年、博が七十四歳で亡くなったとき、作家の芹沢光治良は、故郷で生涯歌人として精進した博に対して次の弔歌を捧げました。

ふるさとの尊き花のひとつ散り
かなしき極み君を葬ふ

昭和六十一年には、故郷の三島市にある市立公園楽寿園（三島市一番町）内に、画家・下田舜堂が委員長となり建設委員会が設置され、歌碑が建立されました。

浪の秀に　博
裾洗はせて
大き月
ゆらりゆらりと
遊ぶが
ごとし

大岡博歌碑と碑文
（三島市立公園楽寿園）

■大岡博の主な作品

これらの作品は、現在絶版になっていますが、一部は沼津市立図書館などで読むことができます。

歌集
『渓流』（昭和二十七年　長谷川書房）
『南麓』（昭和三十八年　春秋社）
『童女半跏』（昭和四十八年　牧羊社）
『春の鷺』（昭和五十七年　花神社）
『大岡博全歌集』（平成二十年　花神社）

歌論集
『日本抒情詩の発生と其の周辺』（昭和三十五年　日本文芸社）
『歌林提唱』（昭和五十三年　短歌新聞社）
『作歌みちしるべ』（昭和六十年　短歌新聞社、死去後に信によって刊行）

沼津で作家デビューを果たした
太宰 治 明治四十二～昭和二十三年

昭和 19 年 三鷹の自宅付近で
撮影：渡辺好章
（日本近代文学館所蔵）

明治四十二年、青森県北津軽郡金木村（現・五所川原市）に生まれます。本名は津島修治。

大正十四年、旧制青森中学校（現・県立青森高等学校）の『校友会誌』に最初の創作「最後の太閤」を発表します。この頃から作家に対して憧れ、芥川龍之介や菊池寛などの著作に親しみます。東京帝国大学入学後、作家の井伏鱒二を訪ね、以後長く教えを受けました。

昭和七年八月、静養を兼ねて静浦村（現・沼津市志下）の坂部啓次郎宅に約一か月滞在し、文壇的デビュー作と位置付けた自伝的小説「思ひ出」を執筆しました。このことから「作家・太宰治」は沼津で生まれた、といわれています。

また、昭和二十二年二月から三月上旬まで三津の安田屋旅館に滞在し、戦後を生きる没落貴族を描いた長編小説「斜陽」の第一、二章を執筆しました。同年十二月に単行本として刊行されると、たちまちベストセラーとなり、この頃から流行作家として広く注目されました。

志下海岸の夕暮れ

発端丈山から淡島・三津方面

■沼津で執筆した作品

思ひ出（小説）

この作品は、太宰が青森で過ごした幼い頃を元に描いた自伝的な作品です。物語の冒頭部分を紹介します。

叔母についての追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思い出は生憎と一つも持ち合せない。曾祖母、祖母、父、母、兄三人、姉四人、弟一人、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だった筈であるが、叔母を除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにいたと言ってよい。広い裏庭に、むかし林檎の大木が五六本あったようで、どんよりと曇った日、それらの木に女の子が多人数で登って行った有様や、そのおなじ庭の一隅に菊畑があって、雨の降っていたとき、私はやはり大勢の女の子らと傘さし合って菊の花の咲きそろっているのを眺めたことなど、幽かに覚えて居るけれど、あの女の子らが私の姉や従姉たちだったかも知れない。

六つ七つになると思い出もはっきりしている。私がたけという女中から本を読むことを教えられ、二人で様々の本を読み合った。たけは私の教育に夢中であった。私は病身だったので、寝ながらたくさん本を読んだ。読む本がなくなれば、たけは村の日曜学校などから子供の本をどしどし借りて来て私に読ませた。私は黙読することを覚えていたので、いくら本を読んでも疲れないのだ。たけは又、私に道徳を教えた。お寺へ屢々連れて行って、地獄極楽の御絵掛地を見せて説明した。

初出『海豹』昭和八年四・六・七月号

昭和７年夏　静浦の坂部宅で（右）太宰治
（日本近代文学館所蔵）

斜陽（小説）

太平洋戦争後の没落した貴族の母、姉弟を描いた作品です。太宰は、その第一、二章を三津に滞在して書きました。第一章から一部を紹介します。

私たちが、東京の西片町のお家を捨て、伊豆のこの、ちょっと支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏をしたとしの、十二月のはじめであった。お父上がお亡くなりになってから、私たちの家の経済はお母さまの弟で、そうしていまではお母さまのたった一人の肉親でいらっしゃる和田の叔父さまが、全部お世話して下さっていたのだが、戦争が終って世の中が変り、和田の叔父さまが、もう駄目だ、家を売るより他はない、女中にも皆ひまを出して、親子二人で、どこか田舎の小綺麗な家を買い、気ままに暮したほうがいい、とお母さまにお言い渡しになった様子で、お母さまは、お金の事は子供よりも、もっと何もわからないお方だし、和田の叔父さまからそう言われて、それではどうかよろしく、とお願いしてしまったようである。

十一月の末に叔父さまから速達が来て、駿豆鉄道の沿線に河田子爵の別荘が売り物に出ている、家は高台で見晴しがよく、畑も百坪ばかりある、あのあたりは梅の名所で、冬暖かく夏涼しく、住めばきっと、お気に召すところと思う、先方と直接お逢いになってお話をする必要もあると思われるから、明日、とにかく銀座の私の事務所までおいでを乞う、という文面で、

「お母さま、おいでなさる？」

と私がたずねると、

「だって、お願いしていたんだもの。」

と、とてもたまらなく淋しそうに笑っておっしゃった。

初出　『新潮』昭和二十二年七～十月号
初刊　昭和二十二年　新潮社

注

（1）昔の中国の呼び名

安田屋旅館（内浦三津）

昭和 19 年 三鷹の自宅付近で
撮影：渡辺好章
（日本近代文学館所蔵）

敷地内の文学碑 「斜陽」碑

太宰が滞在した客室

■読める太宰治の作品

数多く出版されているため、ここでは代表作を中心に紹介します。

文庫版

『富嶽百景（ふがくひゃっけい）・走れメロス 他八篇』（昭和三十二年 岩波書店）
『斜陽 他一篇』（昭和六十三年 岩波書店）
『人間失格／グッド・バイ 他一篇』（昭和六十三年 岩波書店）
『お伽草紙（とぎぞうし）・新釈諸国噺（しんしゃくしょこくばなし）』（平成十六年 岩波書店）
『津軽』（平成十六年 新潮社）

など多数

このほか、紹介した「思ひ出」は、インターネット上の青空文庫でも読むことができます。
https://www.aozora.gr.jp/index.html

三津ゆかりの作家

田中英光　大正二～昭和二十四年

昭和 24 年夏
（日本近代文学館所蔵）

東京府東京市赤坂区榎坂町（現・東京都港区赤坂）に生まれ、鎌倉に育ちます。兄に添削してもらい、小学生の頃より詩や作文を児童雑誌『赤い鳥』に投稿します。

昭和七年、早稲田大学在学中、ロサンゼルス五輪にボート競技選手として出場しました。後に、この体験を基に青春小説「オリンポスの果実」（『文学界』昭和十五年九月号）を執筆しました。

昭和十年、大学卒業後、横浜護謨製造株式会社（現・横浜ゴム）に就職し、京城（現・韓国ソウル）出張所勤務となります。同年創刊の同人誌『非望』に掲載した「空吹く風」に対し、太宰治から好意的な批評が届き、以後太宰に師事しました。

戦後の昭和二十年九月、前年に疎開していた家族のいる三津に移住し、安田屋旅館に出入りして執筆に勤しみました。

翌年、日本共産党に入党し、一時三津から西間門にあった沼津地区委員会事務所に移住します。地区委員長を務め、国鉄（現在のＪＲ）労働争議のため沼津機関区（大手町、現・プラサヴェルデ所在地）で機関区員を支援しましたが、活動の行き詰まりなどから辞任し、三津に戻りました。

安田屋旅館から富士を望む（沼津市明治史料館所蔵）

以降、執筆に専念し、昭和二十二年には三津を訪れた太宰を安田屋旅館で迎えました。

沼津を描いた作品に「N機関区」（昭和二十二年）などがあります。

プラサヴェルデ（JR沼津駅北口）

沼津機関区記念碑（JR沼津駅南口）

■作品に描かれる沼津

N機関区（小説）

このN機関区には二千人あまりの組合員がいた。ここは東海道線で電気区と蒸気区の境目にあたるところであり、日本の電気機関車の大半がここの機関庫に入るといわれる、日本でも有数の大機関区だった。そうしてこの機関区に労働組合ができたのは一九四五年十月はじめのことで、鉄道としても日本としてもかなり早い結成式をあげたものだった。この組合ができた当時の話を私はしばしば創立以来つづけて、この組合長をしている山本虎三からきかせてもらった。山本虎三は年のころ四十二、三の男ざかりで、二十何年かのながいあいだ機関士の古参として努めてきて、ふつうならとっくに助役になれたひとだったが、もともと上役に楯をついても下の者を可愛がる気性のところにもってきて、十何年か前、例の四・一六にちよっと関係があったりしたものだから、戦争中ずっと平機関士をやらされていた。その戦争の末期、これをやはり日本人ぜんたいの戦争と思いこむ

ようになっていた山本は、若い機関士たち十何名かと輸送挺身決死隊をつくり、B―二九の爆撃や小型機の機銃掃射などをうけながら、石炭の積み込みにけん命だったこともある。そうして終戦直前にN市が爆撃をうけたとき、山本の家は罹災(1)した。おまけに彼はそのすぐあとで赤痢かチブスにかかったので、八月から九月にかけて、ずっと鉄道を休んでしまった。その病床で彼は敗戦のニュースをききはやくも労働組合のことを考えていたそうだ。そうして十月はじめに出勤できるようになると、一種の虚脱状態におちいっている職場で、彼はすぐ労働組合の趣旨をとき同志をつのってみたが、はじめにはひとりとして彼の言葉に耳をかたむける者がなかった。こうしたことを虎さんはときどき一種の感慨をこめいくらか自慢話のようにして私に話してきかせた。

初出『太平』昭和二十二年二月号
初刊『嘘と少女』昭和二十四年 真善美社

注

(1) 火災などの災害にあうこと。

■読める田中英光の作品

文庫版

『田中英光傑作選 オリンポスの果実／さようなら 他』（平成二十七年 KADOKAWA）

『師 太宰治』（平成六年 津軽書房）

など

このほか、紹介した「N機関区」は、『田中英光全集』第五巻（昭和三十九年 芳賀書店）に収録されています。現在絶版になっていますが、沼津市立図書館などで読むことができます。

昭和 24 年夏
（日本近代文学館所蔵）

沼津中学校を卒業した作家

江崎惇　大正四～平成七年

（『侍たちの茶摘み唄』から）

大正四年、現在の三島市に生まれます。本名・関野惇。昭和八年、旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）を卒業しました。慶應義塾大学卒業後、放送局勤務を経て文筆業に入ります。

県内の歴史や人物にかかわる歴史小説を多数著し、昭和五十二年に『蛇捕り宇一譚』で日本作家クラブ賞を受賞。

主な作品に『現代郷土偉人伝放送ドラマ』（昭和三十九年）、『ドキュメント明治の清水次郎長』、『史実山田長政』（昭和六十一年）、『侍たちの茶摘み唄』（平成四年）などがあります。

静岡市に住み、平成三年、静岡市政功労者（教育文化功労）として表彰されます。日本文芸家クラブ名誉会員、大衆文学研究会静岡支部会長、静岡市議会議員などを歴任し、SBS静岡放送で番組制作にも携わりました。

創立当時の沼津中学校（『沼中東高百年史』から）

鉄舟危難（小説）

江崎の作品から、沼津に触れているものを紹介します。この作品は、実在した幕末の政治家・山岡鉄舟が、将軍・徳川慶喜から命じられて駿府（現・静岡市）に向かった史実を材料として描いた歴史小説です。次の文章は、三島にある竜沢寺から沼津を通り、静岡に向かう道中の一場面です。

竜沢寺から三島明神(1)を過ぎれば東海道の松並木。駿河と伊豆の国境境川に架けられた千貫樋（三島から駿河への灌漑用水）もひとまたぎ、源頼朝が旗揚げののち、奥州から馳せ参じた義経と対面した黄瀬川を渡れば、そこはもう沼津の宿。沼津、原と韋駄天走りの鉄舟は、吉原で富士山を左に見て、蒲原、由比宿を抜ければ、倉沢は薩埵峠の登り口。

『蛇捕り宇一譚』昭和五十二年　新人物往来社

注

（1）三島大社（三島市大宮町）のこと

（2）現在の東北地方

■江崎惇の主な作品

現在、これらの作品は絶版になっていますが、一部の作品は、沼津市立図書館などで読むことができます。

『蛇捕り宇一譚』（昭和五十二年　新人物往来社）

『頼朝をめぐる女たち』（昭和五十五年　スポーツニッポン新聞社出版局）

『実録川上貞奴―世界を翔けた炎の女―』（昭和六十年　新人物往来社）

『史実山田長政』（昭和六十一年　新人物往来社）

『ドキュメント明治の清水次郎長』（昭和六十一年　毎日新聞社）

『侍たちの茶摘み唄』（平成四年　鷹書房弓プレス）

など

沼津で育った芥川賞作家

川村晃　昭和二～平成八年

（『美談の出発』から）

昭和二年、台湾に生まれ、昭和五年に一家で沼津市に移住します。沼津市立第一小学校から父・四郎が嘱託の音楽教師を務める旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）に進学しますが、昭和十六年、二年生のとき回覧誌に短編小説「海辺の姉妹」を発表すると、風紀紊乱に当たるとして無期停学処分を受けます（同年十二月八日の太平洋戦争開戦により解除）。神経衰弱のため実質上の放校処分となりますが、後に兵庫県尾上の陸軍航空通信学校に入校しました。

昭和二十年八月、敗戦により沼津へ戻り、十月に上京。昭和三十七年三月に「美談の出発」を『文学街』に発表し、同年七月、芥川賞を受賞しました。

文筆業をしながら『毎日新聞』の人生相談を担当し、テレビなどの番組にも多数出演しました。

沼津を舞台とした作品に、沼津兵学校を描いた『維新の兵学校』（昭和四十三年）などがあります。

■川村晃の作品から

あとがき（『維新の兵学校』）

小学校の入学式のときのことです。私は講堂に入ったとたんに、偉くなったような、場ちがいのところへ迷い込んだような、奇妙な気持にかられたものでした。周囲の壁にぐるっと、陸軍大将や海軍大将などのいかめしい肖像画が、実に二十ほどもかかげられていたからです。

私の故郷は沼津であり、私の入学した沼津第一小学校が沼津兵学校の付属小学校の後身で、それらの将軍たちはいわば大先輩というわけでした。（略）

沼津を去ってすでに二十余年、いまではすっかりスモッグの東京になじんでいるのですが、その間、それでも私はしばしば沼津を振り返りました。それはべつに、ふけこんで感傷的になったり退嬰的(たいえい)(1)になったからのことではなく、自分を知るためには土台となっている幼少時を考えなおし、故郷の自然風土、精神風土なるものを見なおしてみようと思ってのことでしたが、そのつど、いささかへんな話ですが沼津や沼津兵学校に借りがあるような思いをおぼえさせられました。いつか沼津を書こう、沼津兵学校を書いてみよう、借りを返すまでは病気にもなるな。

沼津市立第一小学校（八幡町）

「維新の兵学校」は、そういう気持が積もりに積もったうえで出来上がった作品です。

昭和四十三年　人物往来社

注

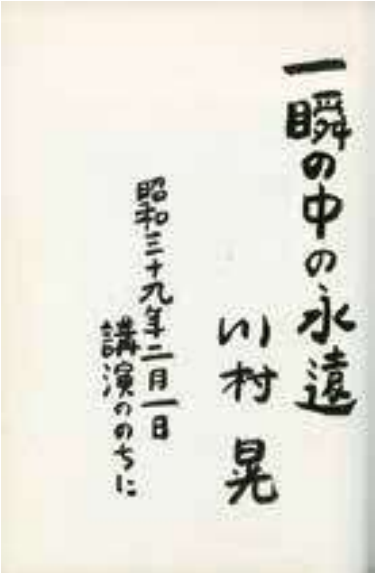
（1）しりごみすること

城岡神社境内にある沼津兵学校跡碑（大手町）

■川村晃の主な作品

現在、これらの作品は絶版になっていますが、一部の作品は、沼津市立図書館などで読むことができます。

『美談の出発』（昭和三十七年　文芸春秋新社）
『ルン・プロ』（昭和三十八年　角川書店）
『若い廃墟』（昭和三十九年　学習研究社）
『太陽と愛と』（昭和三十九年　冬樹社）
『闇にひらく』（昭和四十一年　河出書房）
『維新の兵学校』（昭和四十三年　人物往来社）
『岩崎弥太郎　物語と史蹟をたずねて』（昭和五十五年　成美堂出版）
『宮本武蔵　物語と史蹟をたずねて』（昭和五十九年　成美堂出版）
など



講演会時のサイン
（沼津東高校所蔵）

昭和39年　沼津東高校での講演
（沼津東高校文芸部発行『MINERVA』から）

ここからは、現代に活躍する沼津ゆかりの文学者を紹介します。

戸田村に生まれ育った作家

佐藤 雅彦 昭和二十九年～

撮影：岡田卓士
（佐藤雅彦氏所蔵）

昭和二十九年、田方郡戸田村（現・沼津市戸田）に生まれます。

昭和四十七年、県立沼津東高等学校を卒業します。東京大学教育学部教育学科を卒業後、電通に入社。

企画制作したCMとしては、湖池屋の『ドンタコス』『スコーン』、NECの『バザールでござーる』など、テレビ番組としては『ピタゴラスイッチ』などがあります。

慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、平成十八年より東京芸術大学大学院映像研究科教授に、令和三年より同大学の名誉教授に就任します。

エッセイや小説も数多く執筆し、特に沼津に関連した作品に、戸田村で過ごした頃を描いた小説『砂浜』（平成十六年）などがあります。

また、統合された旧戸田中学校の卒業生であることから、令和三年四月、新たに開校した沼津市立戸田小中一貫学校の新校歌『戸田の風』の作詞を手掛けました。

佐藤雅彦氏所蔵

■作品に描かれる沼津

砂浜（小説）

その村には、御浜と呼ばれる湾に細長くとび出た美しい砂浜があった。砂嘴というその地形のおかげで、内海は波の静かな自然の港になっている。砂浜がひろがるのは、内海に向いた側であり、松林を境として外海は、大きな丸い岩がどこまでも続いていて、うちつける波が白い細かい泡を、絶えずつくっていた。

夏には浜木綿が咲きみだれるその村は、一方を海に面するだけで、ほかの三方は山々に囲まれ閉ざされていた。どこか外の場所に行くのに、村の人は日に二本しかない定期船に乗り、海伝いに出ていた。

佐藤が過ごした戸田の御浜海岸
昭和 30 年代
（沼津市戸田造船郷土資料博物館所蔵）

平成十六年　紀伊國屋書店

戸田の風（戸田小中一貫学校　校歌）

作詞　佐藤雅彦　作曲　栗原正己

一

碧く　しずかに　かがやく　内海
いつも　大きく　見守ってくれる　達磨山
澄んだ空気　宝もの　われら　ここで学ぶ
走り出そう　希望の風に　いま　向かって

二

白く　砕ける波は　石を　丸く研ぎ
外海を行く　かつお船　富士と眺める
海と山と水と光　われら　ここで学ぶ
走り出そう　希望の風に　強く　向かって

三

橘の白い花　清らかに　香り
天を高く　見上げれば　鳶が弧を描く

澄んだ空気　宝もの　われら　ここで学ぶ
走り出そう　あしたの風に　いま　向かって

深い海の　潮の恵み　大きく　大きく　息を
息を　吸って
走り出そう　あしたの風に　いま　向かって
走り出そう　あしたの風に　いま　向かって

沼津市立戸田小中一貫学校（戸田）

戸田港

■読める佐藤雅彦の作品

文庫版
『プチ哲学』（平成十六年　中央公論新社）
『毎月新聞』（平成二十一年　中央公論新社）

単行本
『新しい分かり方』（平成二十九年　中央公論新社）
『考えの整頓（せいとん）　ベンチの足』（令和三年　暮しの手帖社）
など多数

このほか紹介した『砂浜』（平成十六年　紀伊國屋書店）は、現在絶版ですが、沼津市立図書館などで読むことができます。

沼津に生まれ育った時代小説家

鈴木　英治　昭和三十五年～

鈴木英治氏所蔵

昭和三十五年、沼津市に生まれます。沼津市立沼津高等学校、明治大学経営学部を卒業。第十七期（平成十九～二十年）燦々ぬまづ大使に就任。妻は歴史小説家の秋山香乃。

平成十一年に「駿府に吹く風」で角川春樹小説賞特別賞を受賞し、翌年三月に『義元謀殺』と改題出版してデビューしました。主に、江戸時代の事件や人物を素材にして創作する時代小説を手掛け、著書は二百冊以上にのぼります。

代表作に『義元、遼たり』（令和元年）、累計三百万部を超える『口入屋用心棒』シリーズ（平成十七年～）、『江戸の雷神』シリーズ（平成三十年～）、『突きの鬼一』シリーズ（平成三十年～）、『父子十手捕物日記』シリーズ（平成十六年～）などがあります。

これらの著作のうち、沼津を思わせる沼里藩の留守居役を主人公にした作品に『沼里藩留守居役忠勤控』シリーズ（平成二十九年～）や、沼里藩を舞台にした『新兵衛捕物御用』シリーズ（平成十五～十八年）などがあります。

沼津市立沼津高校（三枚橋鐘突免）

■作品に描かれる沼津

水斬の剣（小説）

江戸時代、架空の藩である沼里（沼津）で起こった殺人事件を描いた時代小説です。次の文章は、主人公達が鹿抜山（香貫山）から町を眺める場面です。

思いついて鹿抜山をのぼってみた。

三合目あたりに、桜の木がかたまって生えている平坦な場所がある。時季には大勢の花見客でにぎわう場所で、物見平と呼ばれている。

戦国時代、駿河のあるじだった今川家なきあと北条と武田の争奪の地となった沼里。北条方がつくった当時の名残だが、今はそこからの眺望が知られた平和な一角だ。

新兵衛はあと一歩踏みだせば崖、というぎりぎりのところに立った。落ちる者がないように一応は二本の綱が張られている。

横で源次が感嘆の声をあげた。こんなときにと思ったらしく、すぐにごまかしの咳払いをした。

確かに、いつ来てもいい景色だった。眼下には、狩場川をはさんで沼里の町が広がっている。

三層の天守が中天にかかろうとしている日を浴び、白く輝いている。下を流れる狩場川は伊豆の雪解けの影響も若干あるのか、ふだんより水量が多い。その流れを行きかう大小の船の群れ。

さっき渡ってきたばかりの青瀬橋が意外に遠くに見え、米粒のような人影がひっきりなしに往来している。町人たちも殿さまのかどわかしはすでに知っているだろうが、そこにはいつもと変わらぬ日常があった。

平成十五年　角川春樹事務所

舞台のモデルとなった黒瀬橋・狩野川・香貫山

■読める鈴木英治の作品

数多くあるため、ここではその一部を紹介します。

文庫版

新兵衛捕物御用シリーズ

『水斬の剣』（平成十五年　角川春樹事務所）

『夕霧の剣』（平成十六年　角川春樹事務所）

『白閃の剣』（平成十七年　角川春樹事務所）

『暁の剣』（平成十八年　角川春樹事務所）

沼里藩留守居役忠勤控シリーズ

『信義の雪』（平成二十九年　KADOKAWA）

『果断の桜』（平成二十九年　KADOKAWA）

『流転の虹』（平成三十年　KADOKAWA）

『義元、遼たり』（令和四年　徳間書店）

など多数

シリーズ名称は徳間書店版（電子書籍版を含む）から

沼津ゆかりの歴史小説家

秋山 香乃 昭和四十三年～

秋山香乃氏所蔵

昭和四十三年、福岡県北九州市に生まれます。沼津市在住。夫は時代小説家の鈴木英治。

平成十二年に秋山香乃とは別のペンネームでデビューした後、平成十四年に秋山香乃として作家デビューします。

主に、歴史小説を手掛け、平成二十七年からスタートした新聞連載小説『龍が哭く 河井継之助』が、野村胡堂文学賞を受賞。『氏真、寂たり』（令和元年）など多数の著書があります。

令和四年三月から令和五年三月にかけて、鎌倉幕府を開いた源頼朝のことを描いた「頼朝 陰の如く 雷霆の如し」を『静岡新聞』に連載します。小説のほか、書評も手掛けています。

また、令和元年には、伝奇作家としてデビューし、同年に海外デビューを果たしました。

沼津が登場する作品に『火裂の剣 助太刀人半次郎』（平成十七年）、『伊庭八郎幕末異聞 未熟者』（平成二十一年）、『伊庭八郎凍土に奔る』（平成二十三年）や『氏真、寂たり』（令和元年）などがあります。

■作品で描かれる沼津

伊庭八郎凍土に奔る（小説）

江戸時代から明治時代に移り変わる激動の時代に生きた片腕の剣士・伊庭八郎を描いた作品です。物語は沼津から始まります。

沼津に入ってから雨ばかり降っている。今日も朝から満街を濡らす。

田植えを控えた初夏の雨は、海からの風に煽られ、太い線を描いて斜めに地面へ突き刺さった。

泥が弾かれ、伊庭八郎の足元が土色にけぶる。こんな日に山に登る馬鹿はいない。

（俺くらいなものさ）

八郎は肩をすくめた。

山と言っても、八郎が登っているのは、標高が六百四十三尺（百九十三メートル）ほどしかない小さな香貫山だ。山頂まで登っても、せいぜい散歩程度の距離なのだ。

十二日前の五月五日から宿所にした霊山寺の裏手に、登山道が伸びている。

霊山寺は、地元の者に「れいぜんじ」の呼び方で親しまれる、この界隈では大きな曹洞宗の寺である。山門前の火伏せの大銀杏が目印で、西光院と光明院という二つの塔頭を従えていた。

総勢二百七十五名もの遊撃隊を分宿させるのに、ちょうどよい規模である。

別に八郎たちがここと決めたわけではない。沼津藩からの提案である。監視はきつくないが、一応名目は〝お預け〟の身であった。

新政府軍総督府から軍監も差し向けられているが、行動を縛られたことはない。

〝遊撃隊〟は元々、長州征伐を見据え、慶応二（一八六六）年に幕臣によって組織された総勢六百名ほどの幕府銃撃隊の一つであった。

沼津に駐屯しているのは、本物の遊撃隊ではない。

平成二十三年　双葉社

作品で描かれる霊山寺（本郷町）

■読める秋山香乃の作品

数多くあるため、ここでは文庫版を中心にその一部を紹介します。

文庫版

『火の姫　茶々と信長』（平成二十三年　文芸社）
『火の姫　茶々と秀吉』（平成二十三年　文芸社）
『火の姫　茶々と家康』（平成二十三年　文芸社）
『龍が哭く　河井継之助』（令和二年　PHP研究所）
『氏真、寂たり』（令和四年　徳間書店）

単行本

『柳生十兵衛神妙剣』（平成十五年　文芸社）
など多数

このほか、紹介した『伊庭八郎凍土に奔る』（単行本　平成二十三年　双葉社、文庫版　平成二十九年　徳間書店）は、紙書籍版は現在絶版ですが、沼津市立図書館などで読むことができ、電子書籍版は購入できます。

沼津に生まれ育った作家

曽根 圭介 昭和四十二年～

昭和四十二年、沼津市に生まれます。昭和六十一年、沼津東高等学校を卒業し、早稲田大学商学部へ進学します。大学を中途退学後、一般企業への就職を経て、作品執筆を決意します。

主に推理小説やホラー小説を手がけ、平成十九年、『沈底魚』により江戸川乱歩賞を、短編小説「鼻」により日本ホラー小説大賞短編賞を受賞します。

平成二十一年、短編小説「熱帯夜」で日本推理作家協会賞短編部門を受賞します。

令和三年には、犯罪小説『藁にもすがる獣たち』（平成二十三年）が韓国で映画化されました。

沼津東高校（岡宮）

故郷・沼津を舞台とした作品に、『本ボシ』（『図地反転』改題、平成二十一年）があります。香貫大橋と千本松原で起きた殺人事件を追う刑事、一杉研志を主人公としたミステリー小説です。狩野川、沼津警察署、沼津市民文化センター、駿東郡清水町、伊豆長岡など、市内外が描かれています。

そのほかにも『暗殺競売』（平成二十九年）、『腸詰小僧 曽根圭介短編集』（令和元年）などがあります。

■読める曽根圭介の作品

文庫版

『鼻』（平成十九年　KADOKAWA）

『沈底魚』（平成二十二年　講談社）

『本ボシ』で舞台として描かれた香貫大橋（上写真）と千本松原（下写真）

『熱帯夜』（平成二十二年　KADOKAWA）

『藁にもすがる獣たち』（平成二十五年　講談社）

『暗殺競売』（平成二十九年　KADOKAWA）

『腸詰小僧　曽根圭介短編集』（令和四年　光文社）

など多数

沼津市出身の芥川賞作家

宇佐見（うさみ） りん　平成十一年～

平成十一年、沼津市に生まれます。小学生の頃から物語を作り始め、作家の村上龍（むらかみりゅう）や中上健次（なかがみけんじ）の作品に触発（しょくはつ）されて、高校生のときから本格的に創作に取り組みます。大学では国文学を専攻し、演劇と歌舞伎のサークルに所属して、脚本を担当した作品が舞台で上演されました。

令和元年、大学在学中に『かか』により文芸賞を受賞し、作家デビューを果たします。翌年二十一歳のとき、同作により三島由紀夫（みしまゆきお）賞を史上最年少で受賞します。

令和三年、生きづらさを抱える高校生を描いた第二作『推（お）し、燃（も）ゆ』（令和二年）により芥川（あくたがわ）賞を受賞。純文学作品としては異例とされる累計八十万部を超えるベストセラーとなりました。また、同作はヨーロッパやアメリカ、アジアをはじめ多くの国や地域で翻訳出版されています。

沼津市立図書館（三枚橋町）

令和四年五月十四日には沼津を訪れ、当時刊行されたばかりの第三作『くるまの娘（むすめ）』を沼津市立図書館に寄贈しました。また、小学生の頃から帰省時にしばしば訪れたというマルサン書店仲見世店（大手町　同年五月三十一日閉店）に立ち寄り、その閉店を惜しみました。

■読める宇佐見りんの作品

現在読むことのできる作品は三作品あり、文庫化されている作品もあります。

『かか』（令和元年　河出書房新社）
文庫版（令和四年　河出書房新社）
『推し、燃ゆ』（令和二年　河出書房新社）
文庫版（令和五年　河出書房新社）
『くるまの娘』（令和四年　河出書房新社）

マルサン書店のあった沼津仲見世商店街（大手町）

ゆかりの施設

■沼津市芹沢光治良記念館（施設内容は 19 ページ）

場　　所：沼津市我入道蔓陀ヶ原517-1
開館時間：9 時～16 時 30 分（入館は 16 時まで）
休 館 日：毎週月曜 休日の翌日 年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）
観 覧 料：大人 100 円 小中学生 50 円
（市内の小中学生は無料）
電話・FAX：055-932-0255
メール：kojiro@city.numazu.lg.jp

■沼津市若山牧水記念館（施設内容は 40 ページ）

場　　所：沼津市千本郷林 1907－11
開館時間：9 時～16 時 30 分
休 館 日：毎週月曜 年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）
観 覧 料：大人 200 円 小中学生 100 円
電話・FAX：055-962-0424
メール：bokusui@thn.ne.jp

■長泉町井上靖文学館（施設内容は 27 ページ）

場　　所：駿東郡長泉町東野 515－149
開館時間：10 時～17 時（入館は 16 時 30 分まで）
休 館 日：毎週水曜 年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）
観 覧 料：大人 200 円 高校生以下無料
（長泉町在住・在勤者は無料）
電話：055-986-1771 FAX：055-980-5313

■沼津ゆかりの文学者（近・現代編）

沼津にゆかりの深い文学者は数多く、全てをここに記すことはできないため、明治時代から現代にかけて、沼津に生まれ育った人、あるいは沼津で過ごした人や市内に文学碑や歌碑がある人などを中心に、生まれた順に紹介します。

凡例

名前（職業）（生まれた年～亡くなった年）
沼津との関係・沼津を題材にしている作品名
★…本誌で個別にとりあげている人物

角田竹冷（俳人・政治家）（安政三～大正八年）

現在の富士市に生まれる。本名・真平。少年時代は魚町の商家で奉公をした。明治五年に東京に出て働きながら法律を学び、弁護士となり政界にも進出。幼少の頃から俳諧を好み、明治二十八年、尾崎紅葉らと秋声会の創設に関わり、『毎日新聞』『読売新聞』の俳句選者も務めた。大正九年に門人たちによって千本浜公園内に沼津で最初の文学碑が建立された。

池谷観海（詩人・教師）（文久三～昭和十五年）

現在の藤枝市に生まれる。本名・盈進、通称・鑛太郎。明治三十五年四十歳のとき、旧制沼津中学校に招かれて漢学を教える一方で、徳富蘇峰らとも交流した。在職二十余年、昭和十五年に死去。同年、沼津中学校同窓会有志により千本浜公園内に詩碑が建立された。また、乗運寺で漢文の講座「斯道会」を開いていたことから、牧水の墓の隣に蘇峰筆による「観海先生留魂之碑」がある。『観海詩鈔』

槇不言舎（歌人・医師）（明治元～昭和十七年）

現在の沼津市に生まれる。本名・豊作。東京で学び明治二十五年に沼津へ帰郷し槇医院を開業。父・正覚の影響で詩歌に親しみ、新聞『日本』や『国民新聞』等に俳句や短歌を投稿。医業の傍ら明治三十六年に沼津短歌会を歌人仲間とともに設立した。同会で伊藤左千夫を沼津に招き、交流を深めた。市営斎場近くの共同墓地に墓がある。『沼津風』『不言舎集』

与謝野 鉄幹（歌人）（明治六～昭和十年）

京都府出身。本名・寛。教職を経て、落合直文の門下となり短歌を詠む。妻・晶子とともに各地を旅し、昭和八年には三津や大瀬崎を訪れた。前年に大瀬崎のビャクシン樹林が国の天然記念物に指定されたが、その景観に感動して〈船をすて異国の磯のここちして大樹の栢の陰を踏むかな〉の歌を詠む。大瀬崎にこの歌碑がある。「五松山荘の歌」「三津遊草」

与謝野 晶子（歌人・作家）（明治十一～昭和十七年）

現在の大阪府出身。本名・志やう。二十歳の頃より短歌を投稿し始め、後に夫となる鉄幹の機関誌『明星』に短歌を発表する。代表作に歌集『みだれ髪』等がある。夫・鉄幹と各地を旅し、昭和八年には三津、大瀬崎を訪れ、鉄幹没後にも来遊した。「三津の五松山荘」「三津遊草」『白桜集』『伊豆遊記』

真山 青果（劇作家・作家）（明治十一～昭和二十三年）

宮城県出身。本名・彬。『南小泉村』により注目され、大正二年より松竹に入社。戯曲を手がけた。昭和二十年八月の終戦より沼津市志下に住み、昭和二十三年に心臓麻痺により死去。

前田 千寸（画家・随筆家・教師）（明治十三～昭和三十五年）

高知県出身。大正元年、旧制沼津中学校に赴任。昭和三十一年の退職まで同校で教鞭をとる。沼津市二瀬川に住む。大正九年、創立二十周年に際しスクールカラーである深紫を選定した。大正十四年には矢形の校章をデザインした。古代色の研究を続け、その集大成を昭和三十一年『むらさきくさ』、昭和三十五年『日本色彩文化史』として出版。沼津中学校時代の教え子である芹沢光治良や井上靖などにも影響を与え、『人間の運命』（芹沢光治良）『黯い潮』『夏草冬濤』（井上靖）等の作品には前田をモデルにした人物が登場する。

原田 濱人（俳人・教師）（明治十七～昭和四十七年）

現在の浜松市出身。本名・八郎。教職の傍ら、俳句に親しみ、高浜虚子に師事した。大正十一年に旧制沼津中学校に教頭（英語教師）として赴任した。また、県内の俳句活動を広めることに

尽力し、俳誌『すその』『みずうみ』等に関わった。昭和四十年に香貫山の中腹に句碑が建立された。

★**若山 牧水**（歌人）（明治十八～昭和三年）→三十六ページ

岸田 國士（劇作家）（明治二十三～昭和二十九年）

東京都出身。フランス文学や演劇を学ぶ。昭和十五年から十七年まで大政翼賛会文化部長を務め、太平洋戦争後の昭和二十二年に公職追放となる。戦後、半年間内浦村の三津に住んだ。

★**芹沢 光治良**（作家）（明治二十九～平成五年）→十一ページ

勝田 香月（詩人・政治家）（明治三十二～昭和四十一年）

沼津市出身。本名・穂策。大火の後、富士宮市に転居。二十三歳のとき「出船」を載せた詩集『心のほころび』を出版する。昭和四年、二十九歳で東京都中野町会議員に当選、その後政治家として社会民主運動に貢献した。昭和四十一年死去。東熊堂の大泉寺に眠る。昭和五十六年に沼津市の港口公園に、代表作「出船」の詩碑が建立された。

尾崎 一雄（作家）（明治三十二～昭和五十八年）

三重県出身。昭和十二年短編集『暢気眼鏡』により芥川賞を受賞。小学一～二年生のとき、母方の祖父の家である日枝神社に一時預けられ、沼津に住んだという。『あの日この日』

橋爪 健（詩人・評論家・作家）（明治三十三～昭和三十九年）

長野県出身。旧制沼津中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学文学文科中退。中学校在学中から芹沢光治良や市川彦太郎とともに同人誌をつくり文芸活動をおこなっていた。第一高等学校在学中に前田千寸より校歌の作詞を依頼され、大正九年、沼津中学校創立二十周年記念式典で発表された。「沼津東高等学校校歌」「沼津市立第一小学校校歌」「沼津市立第四中学校校歌」を作詞する。

★**明石 海人**（歌人・教師）（明治三十四～昭和十四年）→四十一ページ

金井 新作（詩人）（明治三十七～昭和五十三年）

沼津市出身。詩に関心を持ち、慶應義塾大学を卒業後、大正十四年『奔流』を創刊主宰し、沼

津の文芸運動を推進した。代表作に詩集『瀛』『題を忘れた絵』等がある。

落合 京太郎（歌人・判事・弁護士）（明治三十八～平成三年）

伊東市出身。本名・鈴木忠一。旧制沼津中学校、旧制第一高等学校を経て東京帝国大学を卒業。昭和六年から東京地裁判事を務め、その後水戸地家裁所長、司法研修所長などを歴任し、退官後は弁護士となる。歌人として二十歳のとき「アララギ」に入会、以後六十余年アララギ選者や静岡アララギの指導などを務めた。死去後の平成四年『落合京太郎歌集』が刊行された。

積 惟勝（歌人・教育者）（明治三十九～昭和五十八年）

熊本県出身。小学校教員を務めた後、昭和十三年東京市立沼津養護学園（我入道）着任。戦後は大諏訪の東京都片浜学寮（児童養護施設「松風荘」）園長となる。昭和五十二年、沼津に「積教育福祉研究所」開設。歌人としても知られ東海短歌会を主宰、沼津こども劇場代表委員を務めた。我入道公園内に歌碑がある。『疎開学園物語』

★**大岡 博**（歌人・教師）（明治四十～昭和五十六年）→四十六ページ

★**井上 靖**（作家・詩人）（明治四十～平成三年）→二十ページ

伊藤 祐輔（歌人・教師）（明治四十～昭和六十二年）

大分県出身。早稲田大学在学中より短歌を創作する。歌人の窪田空穂に師事し、昭和六年、短歌結社「槻の木」に入会する。沼津商業高等学校、静岡高等学校、沼津東高等学校、沼津工業高等学校等で教鞭をとる傍ら、歌人として「愛好短歌」を積惟勝とともに発足する。昭和二十九年、「山脈短歌会」を主宰し、後に歌誌『山脈』を創刊、多くの歌人を育てた。沼津に住み、県歌人協会設立にも尽力した。『石糞』『千本松原』『見蛇楽』『春潮』

★**太宰 治**（作家）（明治四十二～昭和二十三年）→五十ページ

大岡 昇平（作家）（明治四十二～昭和六十三年）

東京都出身。戦争中にアメリカの捕虜となった体験を基にした『俘虜記』や、生存のぎりぎりの状態を描いた『野火』などを手がける一方で恋愛小説も手がけた。終戦後しばらく千本浜の知人宅に身を寄せ、昭和三十年、修善寺・伊豆長岡・沼津などを舞台にした「沼津」を執筆した。

町田 志津子（詩人・教師）（明治四十四～平成二年）

沼津市出身。本名・飯塚しづ。沼津高等女学校（現・沼津西高等学校）、実践女子専門学校国文科を卒業。卒業後は県東部、伊豆で国語教師に就く。昭和二十年、空襲により伊豆長岡に疎開、翌年に沼津市町方町に移る。昭和二十四年から沼津西高等学校に赴任し、詩研究クラブの顧問を務める。昭和二十五年、詩誌『時間』に同人として参加し、詩人として活動を始める。昭和四十三年、五十七歳まで沼津西高等学校に勤務。昭和四十四年、静岡県文化奨励賞受賞。「海のほとり」「母の海」

武田 泰淳（作家・僧侶）（明治四十五～昭和五十一年）

東京都出身。中学から高校にかけての五年間は、現在の沼津市内浦重寺で毎年夏を過ごした。戦中は中国へ出征し、戦後作家活動に専念。昭和二十四年の「海肌の匂い」は、戦後に重寺を再訪した際の体験を基に描いた作品である。『新・東海道五十三次』

★**田中 英光**（作家）（大正二～昭和二十四年）→五十四ページ

渡辺 白泉（俳人・教師）（大正二～昭和四十四年）

東京都出身。本名・威徳。戦後、岡山、三島、沼津で中学・高校の教師として勤めた。沼津市立沼津高等学校勤務のため、昭和二十七年から四十一年まで沼津に住んだ。戦争の本質を鋭くついた俳句を数多く詠んだ。昭和四十四年、通勤中に脳溢血の発作で倒れ翌日死去。没後、沼津高校のロッカーより句稿本が発見され、『白泉句集』（昭和五十年）『渡邊白泉全句集』（昭和五十九年）が刊行された。平成二十二年に、沼津高等学校に句碑が建立された。

清水 杏芽（俳人・医師）（大正二～平成十四年）

埼玉県出身。本名・久明。東京医専卒業。医学博士。戦争中は軍医として従軍、上海で軍医・俳人の神尾静光より指導を受け、帰国後、宇田零雨に入門。昭和二十二年、千本緑町に清水内科医院を開業。昭和二十五年「双葉俳句会」を主宰し、月刊誌『双葉』を創刊する。昭和五十五年、沼津市大諏訪の天満宮（吉祥院）に句碑が建立された。昭和六十二年には松尾芭蕉来沼三百年を記念して、日枝神社に芭蕉の真筆句碑を建立した。『沼津抄』『沼津歳時記』『続沼津歳時記』

★**江崎 惇**（作家）（大正四～平成七年）→五十七ページ

池宮 彰一郎（作家・脚本家）（大正十二～平成十九年）

東京都出身。本名・池上金男。沼津市に育ち、沼津商業学校を卒業。戦後、映画の脚本家となる。平成四年に『四十七人の刺客』で作家デビューし、主に歴史小説を執筆した。第十二期（平成十四～十五年度）燦々ぬまづ大使就任。

玉城 徹（歌人・評論家）（大正十三～平成二十二年）

宮城県出身。昭和六十三年、東京から沼津市大塚、後に下香貫に転居する。昭和四十七年、歌集『樛木』で読売新聞賞を受賞。昭和五十三年に歌誌『うた』を創刊し、主宰した。平成十三年『香貫』で短歌新聞社賞、現代短歌大賞を受賞。「窮巷通信」「沼津の歌・自註」「わが沼津観」

西村 滋（作家）（大正十四～平成二十八年）

愛知県出身。昭和三十六年から平成五年までの三十二年間を沼津市で過ごした。昭和五十年に『雨にも負けて風にも負けて』で日本ノンフィクション賞受賞。昭和五十一年に代表作の自伝的小説『お菓子放浪記』を刊行した。ミュージカル版『お菓子放浪記』は平成二十二年に初演、平成二十八年には沼津市でも公演された。その際、新聞の取材に対して、沼津は「作家生活が始まった場所」と述べている。

★**川村 晃**（作家）（昭和二～平成八年）→五十九ページ

深瀬 サキ（劇作家）（昭和五年～）

沼津市出身。本名・大岡かね子（旧姓・相澤）。夫は詩人の大岡信。沼津学園高等女学校（現・飛龍高等学校）を卒業。大岡とは、大岡の旧制中学校時代の友人を通じて知り合い、後に沼津で偶然出会ったことで交際が始まり結婚。劇作家として数多くの戯曲を手掛けている。

★**大岡 信**（詩人・評論家）（昭和六～平成二十九年）→二十八ページ

海老名 香葉子（エッセイスト・作家・絵本作家）（昭和八年～）

東京都出身。本名・嘉代子。昭和十九年六月、国民学校五年生の時に家族と別れ、一人で沼津の香貫山中腹にある海軍省の官舎に住む叔母の家に疎開。沼津空襲で機銃掃射に襲われる。昭和二十七年、初代林家三平と結婚。自身の戦争体験を基に、絵本やエッセイ等を数多く手掛ける。

第四期(平成六～七年度)燦々ぬまづ大使に就任。『母と昭和とわらべ唄』『いつも笑顔で―あの戦争と母の言葉―』

末吉 暁子(児童文学作家)(昭和十七～平成二十八年)

神奈川県出身。三歳の時から両親の出身地である沼津市に居住。青山学院女子短期大学卒業後、講談社に入社。編集者を務めていた時に創作を始める。退社後の昭和五十年、『かいじゅうになった女の子』で作家デビューする。主に児童文学を手掛けた。

★**佐藤 雅彦**(作家・クリエイティブディレクター)(昭和二十九年～)

→六十二ページ

狩野 あざみ(作家)(昭和三十二年～)

沼津市出身。本名・門倉喜代江。始皇帝暗殺を題材にした『博浪沙異聞』で歴史文学賞受賞。歴史小説を数多く手がける。第六期(平成八～九年度)燦々ぬまづ大使就任。

★**鈴木 英治**(作家)(昭和三十五年～)

→六十五ページ

★**曽根 圭介**(作家)(昭和四十二年～)

→七十一ページ

★**秋山 香乃**(作家)(昭和四十三年～)

→六十八ページ

上坂 あゆ美(歌人)(平成三年～)

沼津市出身。十八歳まで沼津で過す。平成二十九年から短歌を作り始める。生まれ育った沼津での体験を基にした短歌やエッセイを執筆する。『老人ホームで死ぬほどモテたい』

水沢 なお(詩人・作家)(平成七年～)

長泉町出身。沼津の高校に学び、大学在学中から詩作に取り組む。最初の詩「沼津」が『現代詩手帖』投稿欄に掲載される。平成二十八年、「モーニング」で現代詩手帖賞を、令和二年、『美しいからだよ』で中原中也賞を受賞。詩のほか小説も手掛ける。『シー』『うみみたい』

★**宇佐見 りん**(作家)(平成十一年～)

→七十三ページ

■主な参考文献

『田中英光全集』第五巻、第十一巻　田中英光　昭和三十九年　芳賀書店
『現代日本文学大系七十七　太宰治・坂口安吾集』太宰治・坂口安吾　昭和四十四年　筑摩書房
『ふるさとの文学　静岡』高杉一郎・岡田英雄編　昭和四十九年　文京書房
『若山牧水全集　補巻　写真帖』若山喜志子・大悟法利雄編　昭和五十七年　日本図書センター
『菩提樹』大岡博追悼号　通巻第五百二十号　加藤勝三編　昭和五十七年　菩提樹社
『新潮日本文学アルバム十九　太宰治』　昭和五十八年　新潮社
『静岡県出版文化会創立四十周年　静岡教育出版社創立三十周年　記念出版　静岡県の学校』静岡県出版文化会編　昭和六十二年　静岡教育出版社
『伊豆の文学―その風土と作品―』勝呂弘　昭和六十三年　長倉書店
『旧制沼中(沼津東高)二十二期だより』井上靖追悼号　星野重雄編　平成三年　旧・沼津中学校二十二期会
『新潮日本文学アルバム四十八　井上靖』　平成五年　新潮社
『沼津ゆかりの歌人歌集展』沼津市若山牧水記念館編　平成六年　沼津市若山牧水記念館
『ふるさと文学館　第二十六巻【静岡】』藤澤全編　平成六年　ぎょうせい
『新潮日本文学アルバム六十二　芹沢光治良』　平成七年　新潮社
『静岡県と作家たち　近代の文学誌』静岡近代文学研究会編　平成八年　静岡新聞社
『生誕百年記念　芹沢光治良と沼津』芹沢記念会・鈴木吉維・鈴木春雄編　平成八年　静岡新聞社
『沼津の文芸―近代散策―』勝呂奏　平成十年　沼津の文化を語る会
『槇不言舎の研究』関口昌男　平成十三年　静岡新聞社
『沼津中学　沼津東高百年史』上下巻　静岡県立沼津東高等学校創立百周年記念事業実行委員会／沼津中学・沼津東高百年史編集委員会編　平成十三年　静岡県立沼津東高等学校・香陵同窓会
『沼津文学紀行』鈴木邦彦　平成十六年　沼津文学祭開催実行委員会
『井上靖と沼津』勝呂奏　平成十七年　沼津文学祭開催実行委員会
『芹沢光治良研究』鈴木吉維　平成十九年　おうふう
『評伝芹沢光治良　同伴する作家』勝呂奏　平成二十年　翰林書房
『大岡信・全軌跡　年譜』大岡信ことば館編　平成二十五年　増進会出版社
『近代沼津人物列伝』沼津市明治史料館編　平成二十五年　沼津市明治史料館
『詩人・大岡信展図録』世田谷文学館学芸部学芸課編　平成二十七年　世田谷文学館
『幾世の底より　評伝・明石海人』荒波力　平成二十八年　白水社

協力

■本冊子の刊行に際し、次の方々より、資料提供等のご協力をいただきました。また、ここにお名前を記すことができなかった関係各位に厚く御礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

個人

秋山香乃　石井喜彦　井上修一　大岡かね子
岡　寿里　佐藤雅彦　勝呂　奏　鈴木英治
鈴木吉維　曽根圭介　野沢朝子

団体・企業

明石海人顕彰会　一般財団法人井上靖記念文化財団　一般財団法人芹沢光治良記念文化財団　大岡信研究会　株式会社岩波書店　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　株式会社角川春樹事務所　株式会社河出書房新社　株式会社紀伊國屋書店　株式会社講談社　株式会社小学館　株式会社新潮社　株式会社スポーツニッポン出版社　株式会社徳間書店　株式会社双葉社　株式会社文藝春秋　株式会社勉誠社　株式会社ポプラ社　神奈川県立神奈川近代文学館　我入道壮寿会　我入道連合自治会　公益財団法人日本近代文学館　公益社団法人沼津牧水会　静岡県立沼津商業高等学校同窓会「明石海人の会」　静岡県立沼津東高等学校　静岡県立沼津東高等学校香陵同窓会　芹沢光治良記念会　長泉町井上靖文学館　沼津市広報課　沼津市明治史料館　沼津市立図書館　沼津市戸田造船郷土資料博物館　沼津市若山牧水記念館　安田屋旅館　有限会社トピックス

◇掲載資料の著作権については極力調査を行いましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

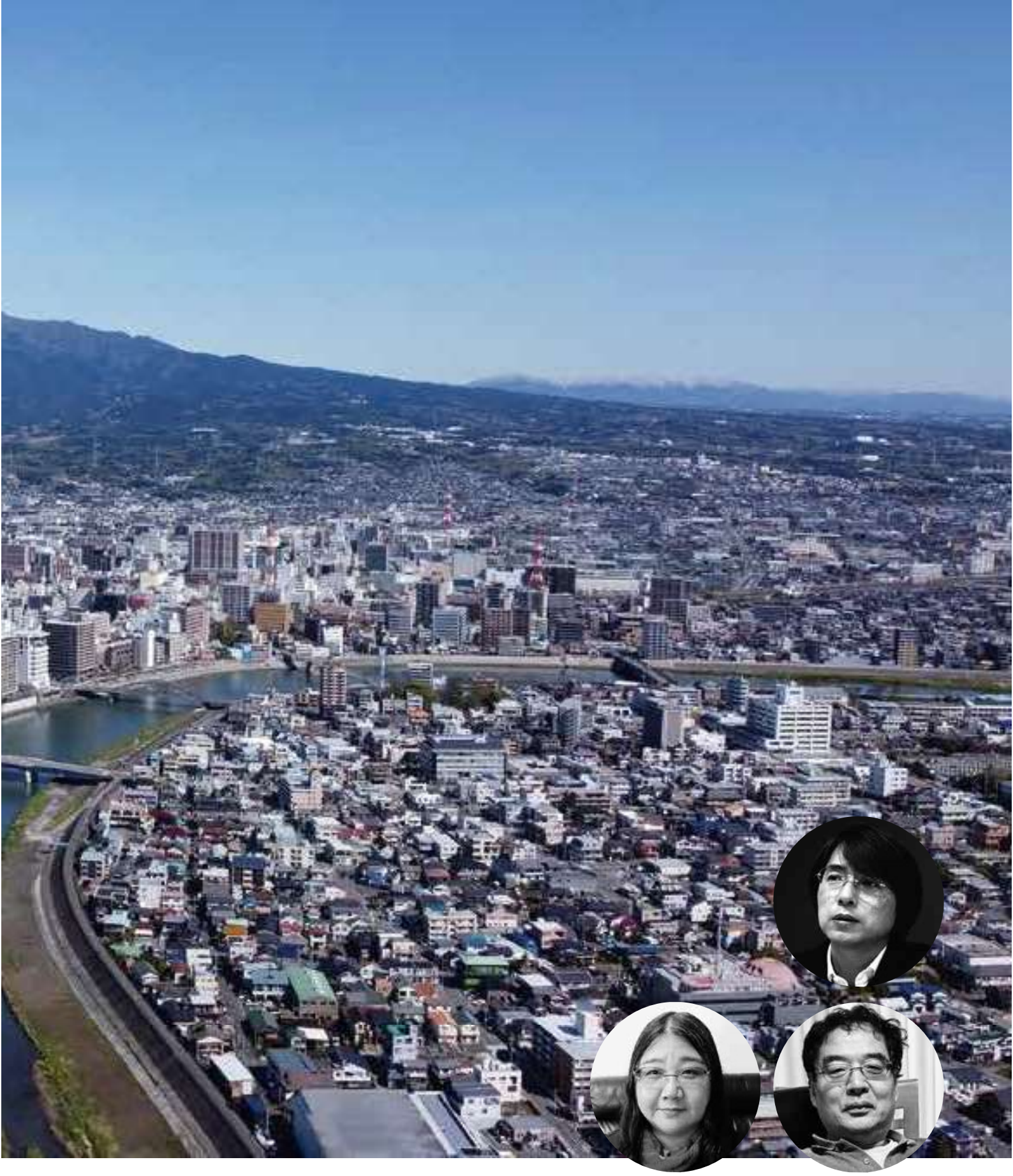
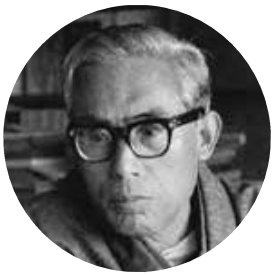
◇収録作品のなかには、今日の観点からみると差別的な表現ととられかねない箇所がありますが、時代性、芸術性を考慮し、原文のままとしました。

◇本書中の写真・記事等の無断転載を禁じます。

『読む×見る×わかる　沼津の文学』

発行日　令和六年三月三十一日

編集・発行　沼津市教育委員会事務局文化振興課
沼津市芹沢光治良記念館
〒四一〇―〇八二三
沼津市我入道蔓陀ヶ原五一七―一
〇五五―九三二―〇二五五

監修　鈴木吉維
勝呂　奏

印刷　文光堂印刷株式会社